

たすける手、 ささえる手。

「手に職をつけなさい」、祖母の世代がよく口にしていたのを思い出す。その手を人のために使うことを選び、確かな技術を身につけた女性たちがいる。彼女たちの仕事場には、人の笑顔と、「ありがとう」の言葉が溢れています。優しい「手」を持つ3人のお話。

写真：豊田都 文：高原たま(P.48~49)、編集部

「わたしも冷え性なんだけど、不思議と手だけはぽかぽか。お母さんのおなかを触っているからかしらね」
そう言って、宗祥子先生はトレードマークの赤い割烹着からのぞいた両手をこすり合わせた。その「あたたかい手」を待っている妊婦さんで、今日も助産院はにぎやかだ。

東京、中野区にある「松が丘助産院」。院長、宗先生の経歴はちよつと異色だ。志すきっかけは自身の初めての出産だったという。

「ものすつごく大変だね。でも絶えず助産師さんが声をかけてくれて、その言葉でこんなに楽になれるんだ、すごい仕事だなんて感じたのね。助

怒って泣いて、励まして。
先生はみんなのお母さん。

宗祥子 (『松が丘助産院』院長)

そう・しょうこ / 1952年東京生まれ。東京都助産師会副会長。東日本大震災で被災した妊産婦さんたちをサポートするプロジェクト「東京里帰りプロジェクト」(<http://www.satogaeri.org>) 発起人。安全な場所で安心して出産できるよう、東京での滞在先や診察を受けられる助産院の紹介などを請け負う。2月には書籍も刊行予定。



赤ちゃんの心音を確認した後、おなかをオイルで優しくマッサージする。お姑さんのこと、子育てのこと、雑談のように聞こえる会話の中にも、母親へのいたわりが感じられる。

産師さんのサポートがなかったら、乗り越えられなかったと思う。そして無事に出産したら、それまで体感したことのないような感動が、体の内側から込み上げてくるわけ。最高の瞬間ですよ。この瞬間に立ち会える助産師という仕事こそ、わたしの天職だ！って思っちゃった」

当時、宗先生は中野区役所職員。仕事と子育てに奮闘する働くお母さんであったけれど、しかし夢の実現も諦めはしなかった。36歳で大学に再入学。看護を学び、助産師資格を取得するべく助産師学校に通った。その間に次女と長男も出産。「うちっから8年もかかっちゃったけど」、44歳にして晴れて資格取得。クリニックスや助産院で経験を積んだのち、98年、松が丘助産院をオープンさせた。「以前の仕事を1とすると、助産師の仕事のおもしろさは100。出産をサポートできるなんて、それこそこんなクリエイティブな仕事、ほかにはないと思うわね」



住宅街にある普通の一軒家。「まるで民宿をやってみたいよ。ご飯の支度して、掃除して洗濯して」。ドアを開けるとご飯のいい匂い。実家に帰ったような安堵感に包まれる。

住宅街にある普通の一軒家。「まるで民宿をやってみたいよ。ご飯の支度して、掃除して洗濯して」。ドアを開けるとご飯のいい匂い。実家に帰ったような安堵感に包まれる。

情報過多の現代、頭でっかちにな
って不安を増幅させる女性は多い。
そんな母親たちが安心して産めて、
自信を持って子育てをスタートでき
る場所を作りたい。強い使命感は、
開院から13年経った今も変わらない。
「うちに来るお母さんは叱り飛ばし
ますよ。なんでこんなに冷えてる
の！ 本を読みすぎよ！ っつて。まず
は自分の体を整えなさい、向き合
いなさいと。意識を変えると体が楽に
なるし、お産にもいいことがいつぱ
いある。そのことに気づいてほしい。
だから食事の指導もするし、運動の
アドバイスもします。いいお産をし
てほしいから、どうしても妊娠中は
厳しくなっちゃうわけ。ときどき超
々怒っちゃうこともあるし(笑)」

そのかわり…と続けた。

「お産中は精一杯ねざらって褒めて、
励まします。お産は、お母さんの心
が剥き出しになっている状態。だか
らこそ、お母さんを最大限に大切に
してあげなくちゃいけないの。そう



松が丘助産院で、入院中のお母さんに供され
る食事。酵素玄米に白菜とねぎ、薄揚げのお
みそ汁。じゃがいもと玉ねぎのだし煮おかか
和えなど小鉢は4つ。砂糖と油は使わない。

してお母さんが自分の力で出産を乗り越えられたら、その後も自信を持って生きていけるから」

実際に叱られ続け、4日前に無事出産したばかりのお母さんは言った。「そりゃあもう(笑)。でも、きちんと叱ってくれたから安心して出産できた。先生は母親みたいな存在です」宗先生にはさらなる夢がある。発展途上の国々に助産院を作って、現地の助産師を育てたい。仕事で訪れたカンボジアやマダガスカルでの経験が、その思いに火をつけた。

「そこでは必要なときに医療を受けられない現実がある。反面、出産に関しては unnecessary 医療介入が非常に多いんですね。これは違う、きちんとお産を見極めて判断できる助産師を育てなければ! と。母体を持つ力だけで出産できる素晴らしさを世界中の人にもっと知ってほしいの」

つい先日カンボジアを訪問したばかりだ。そのあたたかい手が差し伸べられる先に国境はない。



上・生後4日の田中萌子ちゃん。母親の笑子さんをねぎらう宗先生。話しているうちにふたりとも感涙(左上)。右ページ上・診察室の鴨居には、生まれた子どもたちの足型が。